

## は し が き

水は古くから、東南アジアの人間の生活と密接なつながりをもっていた。ひとびとは豊かな水と太陽の光に恵まれた環境のもとで、稲作をいとなみ、生活の糧をえていた。すみかは川辺にあり、水によって往来し物資を輸送していた。東南アジアの国々の近代化がすすむにつれて、伝統的な生活の一部をなしていた水にも、あたらしい利用の可能性がうまれ、同時にいろいろな問題がおこってきている。電力のための水利用とダム建設、農業生産の増大のためのかんがい排水施設の整備、工業化にともなう用水の需要と供給など水資源のあらたな利用をめぐる問題はおい。

東南アジア研究センターは、さきに稲作技術の問題をとりあげ、農林省、海外技術協力事業団とシンポジウムを共催しおおくの成果をえた。このあとをうけ『東南アジアにおける水資源の利用に関するシンポジウム』を昭和40年9月17日から3日間、やはり京都において前回同様農林省、海外技術協力事業団と共催し、現地での調査研究、技術指導、開発計画立案への参画など経験の豊かな各位の参加をうることができた。活発な討論をとおり東南アジアの水資源の利用についてのいろいろな問題のありかをさぐり、過去の業績の評価と今後の活動への指針をえて、みのりおいものがあつた。

ここにその成果を『東南アジア研究』の特集号として発表しおおかたの批判をあおぎたいとおもう。よせられたペーパーの編集はシンポジウム運営委員長富士岡義一教授（農学部農業工学教室）の手になるものである。シンポジウムでの発表者はもとより、討論に参加された各位、富士岡教授および同研究室の諸氏の努力に深い敬意を表したい。

おわりにシンポジウム開催によせられた農林省、海外技術協力事業団をはじめ各界各位の力強い、公私にわたる支援に感謝の意を表し、あわせて東南アジアにおける水資源開発の発展を心からいのるものである。

京都大学東南アジア研究センター

所 長 岩 村 忍